＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter

[No.3 2007/12/20]

平成19年度グローバルCOE論文賞の募集
次回のオープンレクチャーについて
「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約
第３回オープンレクチャーの要約
第１回国際シンポジウム（SHELL）概要
第２回国際シンポジウム概要
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 平成19年度グローバルCOE論文賞の募集

GCOEでは下記の要領で論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2008年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します．多くの方々の積極的なご応募を期待します。

詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。

http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/

■ 次回のオープンレクチャーについて

2008年1月16日（水）18：00～　国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：古尾谷知浩（名古屋大学大学院文学研究科・日本史学）
発表題目：「文字瓦と知識」

■ 「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

10月3日担当　松澤和宏教授（仏文学）

或る人の発した言葉を理解しようとするとき、どのような操作を人は「理解」の名の下に行うのだろうか？

容易に思いつくことは、外国語を学ぶときの体験に重ね合わせて「理解」という営みを考えることである。辞書の定める単語の意味や文法を通して発せられた言葉を解読しようとすることになる。しかしながら、日頃、私たちが言葉を通して他人と意思疎通をはかったり読書をしている時に、実際に生きて働いている精神の営みは、辞書や文法の埒内には到底収まらない。なぜその人はこうした言葉を発したのか、そうした問いを抱かずには私たちの解釈の営みは一瞬たりとも成立しない。仮に言い表されたことが虚言であったとしても、虚言が言い表されたという事実の裡に、表現主体の意図を忖度することになる。機械論的因果関係の説明ではなく、相手の立場に身を置いて内在的に理解しようと努めなければならなくなる。表現内容の真偽ばかりではなく、他者の意図の理解が求められる。そこに身近でありながら、形式論理によっては合理化しきれな

い解釈という領域が顕れてくる。自然科学とは異なる人文学の特徴の一つは、この解釈学的な営為にあると言えよう。勿論これは＜テクスト布置の解釈学＞に向かうほんの一歩に過ぎない。なぜなら他者の意図を内側から理解しようとするいかなる営みも、解釈主体の主観性を完全に払拭することはできないからなのである。そもそも理解に先だって、理解を促し誘導するものに私たちは常に既に囲繞されている。それを先入主と呼んでもよい。いかなる研究もこうした先入主から完全に解放されることはありえない。なぜならそれは理解をそもそも可能にする地平でもあるからである。

こうしてテクストの解釈は、発信者（著者）と受信者（解釈者）の両極を周回する∞の軌道を描く運動となる。言い換えれば、テクストとは二つの輪の接するところ、還元不可能な二重性として顕れてくる。一方でも他方でもないが、つねに双方に同時に関わり合うという場、形式論理では捉え難い、排中律を超えた場ならざる場として顕現してくることになるだろう。

10月31日担当　阿部泰郎教授（比較人文学）

「中世宗教テクストの地平」

日本の中世の宗教テクストの重要なコレクションである大須観音（真福寺）の蔵書に関して、神道テクストが、もっと大きな座標のもとで改めて再び位置づけられることになる、新たな発見が行われた。この報告はそのドキュメントとなる。

『太田命訓伝』は、巻子本の軸の合わせ目に「行忠」という署名があり、13世紀後半に活躍した、度会神道という中世の新しい思想の潮流の担い手、度会行忠の自筆本であることが確認された。また、『麗気記』と総称される、共通した同様の書誌的形態・特徴を持つ一連の神道テクストの体系がある。これは、いわゆる真言神道（両部神道）と呼ばれる、仏教とくに密教と深く結びついた神道のテクストである。これらが、どのような大きな体系のもとで位置づけられるか—その決定的な資料が、『野決目録』である。

『野決目録』中の「本抄」部の冒頭にあたる『大伝法灌頂注式』の奥書には、「野決」具書（いわゆる野決—小野流の口決—に属する一群のテクスト）全体の素性を示す伝来の著者の識語がある。正和２年、宏瑜が鑁海に、文保３年、鑁海が儀海に、そして観応３年、儀海が宥恵（真福寺初代濃信の弟子）に伝授したという。『野決目録』末尾の識語を見ると、「野決」具書は、醍醐僧正＝勝賢と、北院御室＝後白河院皇子・守覚法親王との問答によって生み出されたテクストであることが記しづけられている。

真言密教の流れは、広沢流と小野流の二つに大別される。醍醐寺を拠点として、小野流の中心をなしていたのが三宝院勝賢である。一方、守覚は広沢流に属し、法親王という特別尊貴な立場から、この両方に分裂した真言密教をひとつに統合しようという試みを展開した。これらの神道テクストは、守覚の求めによって勝賢が、小野流（その中でも三宝院流）の秘密をことごとく明かす—口決伝授のプロセスのもとで、次々と明かされていった秘密をテクスト化した書物であることがわかる。ひとつの大きなテクスト宇宙を形作った、守覚法親王という偉大なテクスト作成者の営為の一端として認知できるという意味でも、この「野決」具書群は画期的なテクスト布置の所産と認められるのである。

11月14日担当　古尾谷知浩准教授（日本史学）

「日本古代の戸籍と計帳」

本講義は、日本古代の歴史テクストのうち、中国から継受した法典である律令やその補足・改

正・細則である格式などの法制史料群と、法の執行に伴って生成するテクストである行政文書群の布置構造を検討することを目的とした。具体的には、民衆支配の問題を取り上げ、戸令や賦役令の諸規定の構成、戸籍や計帳の作成手続を解説した。それを踏まえた上で、特に死亡者の取り扱いを、法規定や戸籍・計帳の草案への書き込みなどから分析し、実態の変化が行政文書にどのように表現され、それが法規定にどのように反映されることになったのかを明らかにした。以上のことから、法制史料と行政文書が、実態としての社会の変化の中で双方向的に影響を与えていたことを示した。

■ 第３回オープンレクチャーの要約

2007年12月12日（水）18時〜19時30分
ピエール＝ルイ・レ（パリ第三大学教授）
「『三つの物語』はフローベール作品における小休止なのか？」

この三部作は、どうやらフローベールの当初からの意図に呼応して作られたものではない。フローベールは別々に発表した物語を一冊にまとめたのであり、その全体は一見したところ、飽くことなく書き直された『聖アントワーヌの誘惑』や、完結することのなかった『ブヴァールとペキュシェ』といった大作の間の小休止となっているようにも思える。だが重要なのは、異なる時代（同時代、中世、古代）の物語の集積が、主題や筋立てといった概念を無効にするような形式的類似性を提示し、構想的な統一性を獲得していることである。かくして『三つの物語』は、フローベールが追い求めた「無についての書物」への一歩だったのであろう。

■ GCOE第１回国際シンポジウム(SHELL)概要

2007年9月7日（金）–9日（日）
『英語歴史テクストの文献学的・文法論的研究』
名古屋大学文系総合館 7F カンファレンスホールにて開催。

SHELLは英語の歴史言語学に関する国際研究集会であり、アメリカにおけるICEHL（International Conference on English Historical Linguistics）やヨーロッパにおけるSEHL（Sociedad Espanola de Historiografia Linguistica）と同じ役割を担うアジアの学会として2年に1度開催されている。SHELLは1996年に発足し、元々インターネットを通じて開催されてきたが、2005年に初めて、千葉大学においてオフライン式での大会が企画された。SHELL2007はその第2回大会として、名古屋大学グローバルCOEとの共催で、2007年9月7日（金）〜9日（日）に名古屋大学で開催されたものである。

SHELL2007では、「英語歴史テクストの文献学的・文法論的研究」をテーマとして、歴史言語学と名古屋大学グローバルCOEが取り組むテクスト研究との接点を追求する試みがなされ、海外から3名の先駆的研究者、Dr. Marcus Manfred（University of Innsbruck）、Dr. Young-Bae Park（Kookmin University）、Dr. Hans Sauer（University of Munich）を迎えた招待講演や、シンポジウム”Old English versions of the Gospels: a dialectal-synchronic comparison”が行われた。海外から10件、国内から16件の応募のあった研究発表には国内外から多数の参加者が集まり、連日白熱した議論が展開された。また、OEDや多種多様なコーパスを利用した研究が多くみられ、英語史研究

におけるデータの取得や検証方法についても非常に有意義な情報のやり取りがなされた。

■ GCOE第２回国際シンポジウム概要

2007年12月14日（金）–16日（日）
『バルザック、フローベール　作品の生成と解釈の問題』
名古屋大学文系総合館 7F カンファレンスホールにて開催。

第二回国際シンポジウム「バルザック、フローベール　作品の生成と解釈の問題」（１２月１４日〜１６日）

第二回国際シンポジウム「バルザック、フローベール　作品の生成と解釈の問題」が、フランス、アメリカ、カナダから、研究の最前線で活躍している５名の外国人研究者を招いて、１２月１４日から１６日まで３日間にわたって催された。初日には佐藤教授の挨拶や松澤教授の開会の挨拶のなかで、本プログラムとシンポジウムの趣旨が説明された。作品の生成過程の研究は、従来の文学史や作家研究に加えて、作家の草稿研究を主眼とする生成論と呼ばれる新たな学問が近年発展してきている。しかしながら作品の生成過程をできるだけ客観的に記述しようとする研究は、果たして解釈という営みとは無関係になされる実証主義的な性格のものなのであろうか。解釈の問題は、作品の生成過程を扱う実証研究とは区別されて、作品受容の問題として主に考察されてきた傾向があった。今回のシンポジウムでは、解釈の営みが作品の受容においてばかりか、作品生成の過程においても主要な役割を果たしているのではないか、という問いかけを発条として、バルザックとフローベールという１９世紀フランスを代表する作家の草稿を含むコーパスを取り上げ、充実した研究報告がなされた。書くという営みがすでに書かれたものを再解釈する営みでもあり、先行する、あるいは同時代の様々なテクストに応答する営みであることが、抽象的な一般論に陥らずに、作品解釈を具体的に更新する成果を挙げながら明らかにされていった。とりわけ特筆すべきことは、各講演が独創的なものであったこと、および各講演の後で実に活発な議論が展開されたことである。テクスト布置の解釈学的研究の有効性についての松澤教授の見解には外国の研究者からも実に好意的で積極的な意見が相次いで表明され、フランスでも稀なほどの生産的な意見交換が実現したと言えよう。

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

10月31日にGCOEオフィスで行われたグローバルCOE研究教育員２名による研究報告の要旨を掲載します。

永田道弘「生成論はフーコー的ルーセル像をいかに変えうるか？」

ルーセル研究においては、１９６０年代以降、フーコーに代表される、もっぱら言語の形式的構造からルーセルを評価してきた批評傾向が支配的であった。このような批評傾向が拠るところのものとしては、ルーセル自身が死後出版の書物中で明かした特殊な創作手法（「プロセデ」）があった。しかし、フォルマリスト的アプローチは、手法＝プロセデの抽象的原理を強調しすぎるあまり、ルーセルをルーセルたらしめている作品の荒唐無稽さがどのようにして生まれたの

か、十全に説明しきれていない。しかも、１９８９年の『アフリカの印象』の草稿の発見により、ルーセルはプロセデの抽象的原理のみに頼って作品を書いたわけではないこともわかってきた。しかしながら、『アフリカの印象』の草稿にプロセデの痕跡が殆ど見出されなかったという事実は、皮肉にも、発見された草稿への関心を低下させてしまっている。ルーセル研究が現在も抱える「ルーセル＝プロセデの作家」という図式への呪縛からいかに逃れるべきか？その一つの可能性として、フーコーらが等閑視してきた、テクストをとりまく社会・文化的コンテクストを考察の対象とする方向性がある。今回の発表では、ベル＝エポック期にフランス社会で共有されていたアフリカの通俗的な表象に注目し、いかにしてルーセルがこの表象を素材として自らの作品に取り込み、執筆過程においてどのように変形させたのか、草稿を手がかりに探っていきたい。

杉山奈生子「18世紀フランスにおける彫刻の受容〜描かれた彫刻と綴られた彫刻〜」

　これまでに、18世紀フランスの画家アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画に関して、前テクストであるデッサンとテクストとしてのタブローの関係を生成論として論じ、また、描かれた彫刻モティーフの解釈を、イメージの中のイメージ（絵の中の絵、絵の中の彫刻）という共通項を有するヴァトー以前や同時代の作例との比較・引用関係の追求により新知見を呈した（SITES, 3-1;4-1）。引き続き、ヴァトーの雅宴画に描かれる彫刻モティーフを取り上げ、図像テクストを用いた従来の美術史学的手法による解釈とともに、コンテクストのいくつかの題材を作品解釈に適用し、テクスト布置の総体としての解釈に進展させる予定である。今回は、18世紀当時に流行した古代彫刻版画集やヴェルサイユ庭園の彫刻版画集の受容とヴァトーの描いた彫刻モティーフとの関連について調査報告を行い、公的なプロパガンダとしての美術ではなく18世紀に特徴的な目を喜ばせる私的な鑑賞用としての絵画であったヴァトー作品の新たな解釈を提示した。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年1月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・
GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/
―――

NewsLetter No.3
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2007 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS
・・・…━━━…・